



鍛錬に極みなし

植芝守高氏に訊く

本誌編輯長

高橋重敏

彌生三月の訪れは流石に例年になくきつかつた今冬の寒波をも急激に鈍らせたと思えて、岩間の町外れから洞畑の一本道へかゝる雪融けのぬかるみは、準備に不十分な足もとをすつかりまごつかせた。泥水との格闘十數分筆者はやうやく目指す藪ぶきの一軒家に到達した。品のよいお婆さんが洗濯物を乾かしてゐるすく傍で唐古した柔道衣を纏ひ、木材を二三本肩にかついで歩き出さうとしてゐた老翁が、白髯の豊かな面を、來意を告げる筆者の方へゆつくり向けると、大變おたやかな聲で「植芝はわしぢやだ」とそのきらめきの強い兩眼をやさしく細められた。

合氣武道を呼號して威勢天下を風靡し、數多の陸海將軍を始め數千の門下生を擁してその無敵の武術傳授に専日のなかつた植芝守高先生が、何を感じてか突然その姿を東都から

消し去つたのは大東亞戰爭漸くたけなはならんとする一昨年春の暮晩頃であつた。

或人は植芝の武道にもひとが入つたのだといひ、他の或人はあの男は神がよりになつたのだと噂した。訝しい世間の風評をよこに、先生の纏べてを超越した老妾が囁然と現れたのは茨城縣岩間のほとりであつた。先生は此處で若干の土地を入手され、黙々として鍛を大地に入れ始めた。森林の幹を伐り倒し、森林の根を掘りかへす。村人達はこの血色がよくて品位ある老翁が、考へられない位の精力で毎日ぐんぐん田畑を拓いてゆくのを密裏の眼を以て見た。杉林の一角にはさしやか乍ら神社さへ建てられた。かくて全く第一本に納まられた先生は朝夕かゝる草履を拜し又前記の神社に敬虔な祈りを捧げられるのを例とする外は、全く武の道に精進することを忘れ

「新武道」昭和二十年四月号
たかに見えた。

筆者が植芝先生の強さに就いて種々のことを聞き知つたのはかなり以前からであつた。

講道館に在る英國の青年が遙々柔道修業に來てゐたが、天賦の體格に物をいはずはる毎ら、外人としては珍らしい程の闘志で練習に精進したので數年ならずして目覚ましい上達振りを示し講道館でも四段の資格を授けた。まともによつかると各大學の猛者運でもちよつと手に餘る位の代物になつたのである。當人もすつかり自信をつけてしまつたと思えて、單に柔道にとどまらず廣く體術に就て日本武道の種奥を極めてやらうと思つたのか、滿々たる闘争心を以て植芝先生の道場に介添役一人を伴つて他流試合に來た事がある。先生は前單に立ち合ふことを承諾された。筋肉こそ疎々としてゐるが、日本人としても小柄な方の先生は六尺豊かなこの赤髪若者に對すると肩の處までもない位に背丈が遠ぶ。應感試合に入る前に先生は先づ相手を坐らせて自分もその前に座すとビタリと右手の人差指をこの英人の肩の處におき、さあ立つて見給へと軽く合圖された。無論習眼の青年はニヤニヤと笑つていはれた通りにやらうとした。

處がまるで立てないのである。笑ひは忽ち彼の顔から消えて、赫ら顔はますます赤くなつた。見物してゐる人々への手前もある。最後には頭髪も直立たん許りに頭張つて立たうともがいた。然し結果は依然同じであつて折り返した際はそのまま糊づけにされた如くて、こでも動かかなかつた。暫時の苦闘の後英人はそのすべての企圖を放棄し、只呆然と端坐してゐる植芝先生の笑顔を眺めてゐた。両肩が激しく波打ち、汗は胸毛までも濡らしてゐる始末である。

この話は先生の強味を示すほんの一例にすぎないが、事實先生の指一本は到底常識を以ては解し難い威力を發揮したもので、天龍が先生の門下に入つたのもそれを彼自身に泌みて體驗させられての結果であつた。所謂立ち合つての強さにはかくの如く當代無類といつてよい程の境地を極めた先生である。老婆に入つたと言ひ乍ら、このやうな大戦争を目前にして故無く田舎に引き籠る道理はない。何とか直接お會ひして武道修練に就て貰ひのあらお話を伺つて見たいといふのは筆者長らくの念願であつたのだ。

切り開いた空地に雍正二十年餘りの木の香

も新しい一椽がある。頤地の一角に武學所として先生がその全私財をなげうたれて建てたもので、各方面からの便宜は興へられたが、資材難の今日まがりなりにこれまで仕上げには並大抵の苦勞ではなかつたらしい。未だ内部の噴霧りは出来上つてゐないが、それでも正面床間には兎が飾られ、木刀、而瀟手も既に若干具具へられてきり、筆者が案内されたときは朴訥さうな壯年の農夫が二人僕く眞剣な態度で打ち合つてゐた。

「武道の教授は絶対止めた朝りぢやつたが、この朝のやうに敵の禮儀機が此の上空を折々通りをるとな、村の熱心な人々の希望はどうしても断りきれなくなる。ア、待て待て、その足の踏み込ん方はいけない。かうだ、かう行くんだ」

親切に筆者の話相手になり乍らもすぐ又氣纏に木太刀を合せてゐる兩人の間に響り込んでゆくあたり、目づと身に附いた老師匠の風格が頗る濃い。

解の上では何とか春に入りかけたと言ひ乍ら、陽がかけると直ぐ寒気が容赦なく四邊に忍び寄つて来た。一つ火鉢に遠慮もなく炭火を圍んで、ガラス越しにくぬぎ林の殘雪に覆れる尾の黄い小鳥を眺め乍ら、筆者は

この日の午後から夜にかけて先生に心ゆくまで武道の話を示ることが出来た。判つたこともあつし判らぬこともある。六十餘年の生涯を練武一筋に込めてその技とその理の體得に文字通り心血を注がれた先生の武の秘義が一日たらずの講釋で全くの門外漢たる筆者に理解されようもないのは始めから判り切つたことであり、言葉に傳へ得ぬ言外の境地にこそ植芝流合氣武道の眞面目があることも又容易に推察の出来ることであらう。それにもかかはらず、筆者は老先生の直話を伺つて武道の理解、合氣といふものの了得上大いに啓蒙され、心眼を開かされたやうな氣がする。或ひは只さういふ氣がするだけなのかも知れない。然し兎に角、判つた處だけでもこれを文字に移して見て讀者諸君に何等かの養とした

い。

武とは何であるか、といふことに就ては既に今までも幾多の人々に各様に論じ盡されて来た。武はその字から言つても戈を止める義であるといはれ、或ひは又物を生み出す源であるとも説かれた。然し深々萬葉の勳業に眼を放つならば、今これを宿命によつて萬物がその使命を完うしてゆく形であると解釋

す。この出来より鳥の卵を割いて生れ出たての果實が熟して二つに裂け、新しい種子が地上に散れ落ちるのも皆武の顯現なのである。鳥は鳥で、果實は果實で、夫々の宿命によつて定められたその使命をどうも任りなく果してゆく。これは美しい自然の音であり、そこに約束されるものは何れも来るべき運命の發展である。かく武道は萬象の動きの表であり、この動きは萬象のもつ氣によつて發する。實にこの氣の動きの探究こそ武の道の眞髓を極めんとする者の向ふべき唯一絶対の目標であらねばならぬ。

た　　た　　た

植芝先生の合氣武道が生れるまで、武の追求に就ては略々かゝる考察がはらはれて来たやうである。

このやうに萬象悉皆の動きが氣の變動如何によつて定まるとするならば、この氣はどんな方向に隨つて、言葉を選べば何に合せて變動するべきであらうか。例へば劍法の基本である青眼の構へを以て見ると、之は氣をとつての最も自然な構へであり、いはば無構への構へともいへば可いものであるが、この時構へてゐる本人のもつ氣は既に體のけじめを突破して遂かに天地間に廣がり、大宇宙に彌漫する神氣と混一合體してゐる。かくてこゝ

始めて二箇の體よりは泰山の如く重く、一度び閃めかんな、直ちに雷電をも凌駕する精神力を發揮することも可能なのである。吾人の氣は須らく神の氣と合一せねばならぬ。天地に彌漫する神氣に混然一體化するならば、吾人の武道は最早や人間といふ微々たる存在を離れて宇宙の意志となり、その欲するまゝの大變轉を以て天地間に現成することを傳ふであらう。

◇　　◇

形の武道に精通すること三十年、植芝先生運命の精神上の苦闘は、やうやく武道のあらゆる本來の姿や合氣といふ大命題の解決にありと悟らせたのであつた。

先生は又、合氣とは天人間の引力だとも語つてゐられた。日月との間に存するこの吸引力にびつたりと染るならば、天地間實に無敵の自信は自らにして湧きたまひて来る道理である。

先生は、若州田邊の塾であるが、先生の生涯を武の鍛錬に向けた師匠は、藤本密藏といふ近在の寺の和尚さんであつて、この師匠から、人間の念力の恐ろべきものであることについて、先生自身しつとつちやう聞かされてゐた。この和尚さんの師匠に當る人の直話で

あるが、或る深夜、町外れの野道を歩くと前方の路傍に何やら白く長いものがひらりと舞ひ歩いて来る氣配がした。ハフと思つて眼をこらすと確かに生き物に相違ない。然かも宙に浮いてゐる體を見ればこの世のものとも思はれぬ。この人は思はず詰さんとする氣をひきしめると、膝下丹田にくつと力を入れてこの白い怪物を突き抜かん許りの眼力で睨みつけた。その効力が忽ち現れたのだらう。怪物の動きはびつたりとまるとそのまゝぐにやぐにやと地上に墜れ落ちたやうである。彼ははつとなる息を整へると、眞厚は無用とそのまゝ家へ急ぎ歸つた。翌朝早く、知人の一人が顔色を變へて彼を訪れた。大凶のさざしがあるから至急占つて貰ひたいといふのである。話をきくと、床を離れて何気なく裏庭へ洗面に出て見た處、道路わきの物干竿にかけておいた白色の練絹がすたすたに裂けて地上に落ちてゐたといふ。彼には即座に昨夜の出来事が思ひ起された。妖怪と思つたのは白い練絹の干物であり、今更自己の精神修養の足らざるをひそかに痛ぢたが、然かも我が念力の確かさに幾分の自信を得たのであつた。

話だといつてしまへばそれまでである。然

おそろしさに就て或る暗示を受けずにはあら
れない氣持がする。

人のもつ氣が日月の氣とびつたり合つて、
常體を遙かに超越した力が溢り出るときは、
必ずやその人の心中は全くの清且つ無一切の
汚れと感念とはその最後の一瞥までも跡を絶
つてゐるに違ひない。これこそ全く純一無雜
の心境であり、こゝには濁りの片鱗だにも認
められないのであるが、横芝先生はこれを神
奈なる言葉で語つてゐられた。世帯一切の執
着を断ち切り、身も心も素つ裸となつて始め
て合氣の修業にとりかゝる境地が作られると
いふ譯である。こゝまで行けば、先生が作入
慣れた東都を去り、一切の公費を抛つて吾間
の片田舎にひつこんだ理由解決の曙光がやう
やくさし初めて来ることになるが、武道の本
源は合氣に極まり、合氣は天人間の引力だと
悟つたとき、これを現成する機縁に絶對の大
愛、醜草をも一様に育くむ大自然の大愛以外
にないことを先生は必々と胸中深く體得した
のだつた。

おほらかなる大地の愛、これにこそ先づ何
をおいてもひたりきらねばならぬ。さう眼望
めた先生は、長年の間己が身をくるしめ、心

を鍛へてきたが、いかに苦行を積んで
おけられなかつたわだかまりが、清風に吹き
拂にれる朝露の如く、一瞬に消散した感じが
した。大地に親しむには、農耕に心魂を捧げ
るのだ。よし、一切のゆきがよりを、素ち
切つて土原を掘り起さう。地位も名聲も財産
も、すべてを海深く投げ捨て、餘生のあら
ん限りを自分に合氣の修得に専念しよう。己
れの誠意と貞節とが幾分なりと天のまことに
叩き得るならば、こゝの武道の果るべき
威力の片鱗でも自得させし置くならば、横芝
一人の生涯はそれだけでも充分の価値をも
つ。そしてよし此の大戦争の完遂に横芝は精
進として立つ場から此なりと奮興させて預け
るならぬ。先生はひそかにさう決意され
た。ひそかではあるがゆるがざる決意でもあ
つた。

その夜は今冬の陰寒をこの一夜に出し盡し
て仕舞ふのかと思はれるほど冷え込みが強か
つた。未だ電燈線が入りこまないで、先生
と吾者とは燭燭の晴い光のもとで話し合つた
のであるが、淡い火影が先生の陰影の濃い半
顔を照すと、そのゆたかな白髪がぼんやりと
浮び上り、渡れて来るさびき含んだ聲音は時

にすつと聲方から聞えてくるかの如き
超させたりした。外人武道家を憂ひ上らせ。
天龍の力績をも辟易させたといふあの有名な
指が、炭火に赤く輝いて筆者のすぐ目前にあ
つた。別にさうとりたてゝ過ぎしくもなく、
それは既に普通の農夫の顔くれた指であつ
たが、その過去の輝耀と、含まれた今後の
威力の限度とに思ひを馳せるとき、環翠のせ
いもあつたのだらうが何かひどく神秘なもの
に見えた。

ちれこれとしつこく問ひたてる筆者を面倒
がりもせず、殆んど夜半すぎまで先生は驟々
と御自身の信念を語つて下されたが、やが
て勤められるまゝに寢床に入つた筆者が夜明
け近くの冷氣に、うつすらと夢路から抜け出
たとき、もう隣の寢床は、蚊の聲になつてゐ
た。何かなしに、してやられたと感して起き
上つた耳には、黎明の静寂を遙して響々とひ
びく新りの聲が力つとく追つて来る。午前四
時。霜柱を蹴立て、始められた先生の目録は
この時すでにその半ばなる神殿前の祈禱にま
で進んでゐたのだ。筆者はさつと息をひそめ
て天地の呼吸と合一せんとするその頭々たる
抑揚に全神経を凝らしていつた。